

今を生きる全ての人へ

岐阜市立長良中学校 3年

屋敷 和奏

2022年2732件、2023年3062件、何の数値が見当がつくでしょうか。これは岐阜県が発表した国公立の小・中学校・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数です。この6000件1つ1つに背景があり、関わった当事者がいます。

ではいじめって誰の問題なのでしょう。誰から学ぶべきなのでしょう。私はずっとそんなことを心の中で思ってきました。それは小さな頃から先生や大人からいじめはダメだと教えられてきたからです。ここにいる誰もがそうでしょう。「いじめをしてはいけない」これは常識です。ですが遡れば紀元前からいじめに似たものは争いとしてあったでしょう。そして、それが常識となっている時もありました。では、いつからこの常識がより認識されるようになったのでしょうか。それは、2019年7月3日に起きたいじめによる中学生の自殺、この悲惨で苦しい出来事がきっかけだと思います。

これ以降、先生たちは私たちにより一層力強いいじめはダメだと伝えていきます。でもその姿に、「いじめとは子ども間で起きること」「大人は注意する立場だ」という前提や大人と子どもとの見えない壁を、私は感じてしまいます。「そんなことない。」「そんな考え方は反抗的だ。」と思うのでしょうか。では、なぜいじめが起きてしまった後の会見で、身近な大人たちは「気付いてあげていれば」、「管理不足だった」と言うのでしょうか。まるで、いじめは子ども社会の問題と言わんばかりに。本当に自分のことのように考えているのなら、いじめを認識した時出てくる言葉は、悩みを打ち明けられる関係性を築けなかった過去の自分を、自分の接し方を悔やむ言葉ではないでしょうか。なぜ、社会は学校の責任を問うものばかり取り上げるのでしょうか。まるで、いじめに関わった人がどんな思いで、どうやって生きていたのかなんて問題ではないかのように。周りの大人たちはいじめを、子どものことを、外から見過ぎなのではないでしょうか。

ではもう一度問います。いじめは誰の問題で、誰から学ぶべきなのでしょう。答えは全員です。いじめは大人子ども関係なく関わった全ての人の問題であり、全ての人に教える権利と教わる権利があります。だから大人のみなさんへ、どうか全てを外から判断しないでください。子どもたちもです。みなさんもっと自分ごととしてみてください。自分ごととしてみるというのは、自分の中にある劣等感、優越感、嫉妬、それらをいじめの芽として考え、自分の行動を省みることでないでしょうか。この社会に足りていないのは当事者意識なのです。

これは日本全体の社会問題だと思います。いじめに対する大人の認識だけではありません。政治家の行動を批判するのに選挙権を無駄にする人、嘘かもわからない情報を面白半分には共有する人、お米が高いというのに廃棄する食材がありふれていること。社会に溢れる問題の中に当事者意識の低さによる弊害がいくつあるのでしょうか。それを変えなければいけない。どうにかしなければいけない。でも、同情するでも、共感するでもない。必要なのは当事者意識なのです。取り戻すのはすごく難しいと思います。けれど私たちは、今やらなければいけない。なぜなら、ここ2年でのいじめ件数は6000件以上、もう動き出すには十分なくらい犠牲を払ってしまっているのだから。

では、これらの問題に誰が解決策を出すのでしょうか。政府ですか、先生ですか、自分より人生経験の多い誰かですか。違います。その人たちは、何かヒントをくれるだけです。その答えをみなさんはもう分かっているはずです。そうです、自分を変えられるのは、結局は自分自身なのです。だから私は、これから多くの人の多様な意見を聞きたい。そして、自分のものにしていきたい。そうして揺るぎない自分をつくりたい。美しくも醜くもなる表現力の高い日本語を慎重に美しいまま使いたい。ここで話したことは絶対に忘れません。自分の言葉には必ず責任を取ります。これが私の変え方です。必ずしも誰かと同じである必要はないです。いろいろな変え方があっていいのです。多くの人が自分を変え、当事者意識をもった時、きっとそれは常識に変わる。その常識は、いつまでも続いていく。そうなった時にきっと、一人一人が意志をもち、お互いを受け入れられる社会になるでしょう。

最後に、今を生きる全ての人へ。自分が納得できる自分をつくりましょう。都合のいいように自分を問題の外に出すのはもうやめましょう。私は今日、これから動き出します。